

文献

王善才主編

『清江考古』
(科学出版社・二〇〇四年)



香炉石遺址出土圓底釜（同書彩版一五、1·2·3）



西寺坪遺址出土陶支座（同書彩版九、2）

学術機関

恩施土家族苗族自治州博物館

玄閣をはいると、“巴風土韵”というプレートが置かれているが、その題名の通り、この博物館のもっとも大きな任務は、古代巴族の文物と近世以降の土家族・苗族などの鄂西少数民族の文物を、収集・保存・展示・研究することにある。その任務のため、恩施・建始・巴東・鶴峰・宣恩・来鳳・咸豐・利川の主要な文物のかなりの部分が集積されており、したがって自ずから、清江上流域歴史・文化研究のメッカとなっている。胡家豪館長のもと、朱世学・王晓寧先生らが発掘・調査と研究に



（谷口撮影）



水色清照、十丈分沙石。蜀人見其澄清、因名清江也。

『水經注』「夷水注」

共同研究

清江流域考古学文化研究

清江とは、湖北省最西部の利川市齊岳山龍洞溝に発源し、恩施自治州・長陽自治県の境域を西から東に横断して、宜都市街で長江に流入する、長江支流の一つである。全長は423kmというから、史書にしばしば見える

“八百里清江”という表示は、ほぼ正確にその長さをとらえていることになろう。清江という名称は、もちろん青々とした清流にちなんだものであり、沿岸の経済的開発が進んだ今でも、その流れは濃い緑色をたたえている。長江本・支流の濁流を見慣れているものがはじめてその流れを前にすれば、何か異様な感じをいたぐりにちがいない。

この清江流域の考古学文化研究を課題として、東北学院大学アジア流域文化研究所と重慶師範大学三峡文化与社会發展研究院が共同研究をはじめたいきさつについては、年報『アジア流域文化研究VI』掲載の”共同研究「清江流域考古学文化研究」を開始して”にくわしいが、要するに、アジア流域文化の歴史的研究に一つの研究モデルを提示したいというアジア流域文化研究所の思惑と、三峡文化研究の蓄積をふまえて、その成果を、長江三峡に劣らぬ水運機能を誇った清江流域の考古学文化研究に応用したいという、三峡文化与社会發展研究院の意図が合致したことが、共同研究に合意したもっとも大きな理由である。

三峡文化与社会發展研究院は、教授・副教授だけでも30名を越える一大研究機関であ

り、組織力・財力において彼我の懸隔はあまりにも大きいが、この際よるべき大樹にあまることにして、共同研究を鋭意推進したいというのが、本研究所の正直な願いに他ならない。

研究成果は『アジア流域文化研究』や公開シンポジウムなどによって逐次公開していく予定であるが、研究課題や研究活動の簡単な紹介を主な目的として、年4回、このような研究要覧を発行することにした。多くのかたがこの共同研究に興味をおもち下さって、忌憚のないご意見をいただければ、まことに幸いである。

(アジア流域文化研究所所長・谷口 満)

問題

武落鍾離山の地望

巴族の発祥地とされる武落鍾離山はどこにあったか？ もっとも有力な学説は、史書にみえる長陽の併山をそれとみるもので、具体的には長陽県城龍舟坪から上流約30km、都鎮湾鎮の北、清江南岸に聳える、魁頭岩を主峰とする山塊がこれにあてられている。今日、この都鎮湾鎮の武落鍾離山は清江流域有数の観光地となっており、一年中、観光客を運ぶ遊覧船がひきもきらない情況である。しかし、これに異議をとなえる意見も古くからいくつか存在する。それらの異議の主旨は、武落鍾離山から出発した巴族のその後の移動方向からして、併山は武落鍾離山ではありえないというところにあり、その代表として最近登場したのが、水布壙鎮中



長陽併山（長陽自治県旅游局・清江画廊 | www.qjhlw.com/web/）

